

学校教育目標	視覚障がいのある児童生徒一人一人の自立と社会参加をめざし、教育的ニーズに応じた教育を行うとともに、豊かな心とたくましく生きる力を育てる。 (ミッション) 自分らしく、一人一人が輝いて生きる力を育てる。(QOLの向上) (キーワード) 「伝える」	今年度の 重点目標	①学習指導の充実及び専門性の向上 ②キャリア教育の推進 ③仲間と協力する児童生徒の育成 ④センター的機能の充実 ⑤児童生徒の健康と安全を守る ⑥環境整備を通した業務の改善
--------	--	--------------	--

年 度 当 初							中間結果（ 9 ） 月		
評価項目	部科・分掌	評価の具体項目	現状	(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	評価基準	経過・達成状況	評価	改善方策
①学習指導の充実及び専門性の向上	小中学部	○児童生徒の実態に応じた学習支援を行い、基礎的な知識の定着及び技能の習得を図る。	○児童生徒の実態について情報交換を行っているが、教材や指導方法を共有するまでには至っていない。	○教材や指導方法に関する情報交換が日常的に行われ、児童生徒の学習意欲が高まり、基礎的な知識の定着及び技能の習得ができています。	○月1回の部科会や研究会等を通じ、児童生徒の状況に関する情報交換を行い、指導・支援に活かす。 ○ICT機器等を活用し、学習意欲が高まるよう教材教具を工夫する。	指導者の支援・指導による評価 A：児童生徒の実態に応じた支援・指導ができた。 B：児童生徒の実態に応じた支援・指導がだいたいできた。 C：児童生徒の実態に応じた支援・指導があまりできなかった。 D：児童生徒の実態に応じた支援・指導がほとんどできなかった。	研究会等で児童生徒の実態や支援方法を共有し、個々の実態に配慮した支援を行っている。	B	研究授業等を通して支援や指導方法を共通理解し、専門性を高めていく。
	普通科	○生徒が主体的に学習に取り組み、苦手なことや課題にも向き合い、克服できるように学習活動の工夫と改善を図る。	○様々な活動や集団活動を通して、経験を積み重ね、概ね落ち着いて学習に取り組んでいるが、自己理解が不十分であったり、苦手な活動には消極的になってしまったりすることがある。	○生徒が自らの良さ、個性を生かしながら主体的に学習に取り組み、苦手なことや課題にも向き合い、克服しようとしている。	○部科会で、各生徒の学習活動の工夫について話し合いを持ち、部科の全教職員で改善を行う。	部科教職員に学習改善・生徒の変容についてのアンケートをとり、部科会で評価を行う。 A：全ての生徒の主体性や課題に向き合う態度が、取り組みによって大きく改善された。 B：全ての生徒の主体性や課題に向き合う態度が、取り組みによって改善された。 C：生徒の主体性や課題に向き合う態度が、取り組みによって改善する兆しが見られた。 D：全ての生徒の主体性や課題に向き合う態度が改善されなかった。	現場実習が設定されていることによって、実習の目標を立て、普段の生活の中から意識して行動する姿が見られるようになってきた。苦手な活動でもルールや環境整備により、生徒が取り組もうとする様子もあった。	C	将来の社会参加のイメージから生徒とともに目標を設定する。生徒同士、教職員との対話の機会を持ち、励ましや称賛を行いながら苦手な活動にも主体的に取り組めるようにする。
					○主体的に参加する力を育てる集団活動の場面や役割を設定する。	生徒に集団活動についてのアンケートをとり評価をする。 A：全ての生徒が集団活動で役割を持ち、主体的に参加できたと回答している。 B：半数以上の生徒が集団活動で役割を持ち、主体的に参加できたと回答している。 C：半数以下の生徒が集団活動で役割を持ち、主体的に参加できたと回答している。 D：全ての生徒が集団活動で役割を持ち、主体的に参加できたと回答していない。	生徒のアンケートの結果、半数以上の生徒が集団活動で役割を持ち、主体的に活動できたと感じていた。さらに「集団活動が好き」「集団活動が楽しい」という回答が得られた。	B	産業現場等における実習で明らかになった課題や各教科の課題への取り組みも取り入れながら、より生徒が主体的に取り組める集団活動を設定する。
	保理専攻科	○各生徒の学習方法に合った教材提供と、基本的な知識技能の定着、活用力の習得を図る。	○生徒は資格取得に向け、積極的に学習に取り組んでいる。1、2年生は自己の見え方や学び方に合うICT機器の活用を実践することで、効果的な学習の実現が望まれる。 ○次期学習指導要領に向けた指導方法の研究への取組は今後も継続が必要である。 ○新型コロナウイルス感染予防による休校や学習活動の変更などによる学習への影響が出ている。	○ICT機器を使って学習や復習、演習問題などを行うことができ、発表や質問などにより自己の学習成果を確認できる。	○ICTを活用した学習教材や課題を出し、その振り返りを行う。 ○生徒アンケートを行い、授業や指導の改善に活かす。	ICT機器を使った学習や学習の振り返り・評価の達成度について、生徒アンケートや取組などをもとに総合的に評価。 A：全員の生徒が取り組めた。 B：8割の生徒が取り組めた。 C：6割の生徒が取り組めた。 D：4割の生徒が取り組めた。 E：生徒の取組は4割未満である。	個々の見え方や学習手段にあった教材を提供している。 専攻科の7月の合同学習、9月の課題研究発表では、授業での学習を自分で深め、伝え方の工夫をしながら発表した。生徒アンケートからも、知識をつなげて活用する力が少しずつついてきているという自己評価がみてとれる。	B	引き続き発表や学習や演習問題の振り返りなどの機会を設定し、自己の学習成果の確認と取組への動機づけを行う。

		○めざす姿に向けた学習や授業の改善・工夫に取り組む。		○学習指導計画書の改善をもとにした授業改善について、部科全体での取組を行っている。	○各科目の指導計画書と授業の改善・工夫についての研究会を年間10回以上実施する。 ○休校時のオンライン授業や感染対策下での学習活動の工夫・充実を図り、学習内容の適切な実施をめざす。	授業の工夫・改善に対して部科としての取組状況により評価。 A：工夫改善の具体的な取組が進み、全員が次年度への取組を共有できている。 B：工夫改善の具体的な取組が進んだ C：工夫改善への方向性が決まった。 D：工夫改善への方向性が定まっていない。 E：工夫改善への取組が全くない。	研究では研究授業を通して今後の取組の方向性を共有した。 休校に伴い、オンライン授業での学習を実施し、学習を止めずにこれた。生徒アンケートからは、オンライン授業の1日当たりの時間数やスケジュール、音声の重なりなどについての声が上がっている。また、使用するアプリの研究や検証を進め、環境が整いつつある。	B	部科研究を推進し、授業改善を進める。 オンライン授業の改善を図る。
	教務部	○新学習指導要領の全面実施に向けて環境を整える。	○今年度より小学部学習指導要領の全面実施、来年度は中学部が全面実施となる。 ○新学習指導要領に関して教職員の理解を深めるとともに、諸表簿の様式の改善が必要である。	○育成を目指す資質・能力の三つの柱に対応するよう諸表簿の様式を改善する。	○各部科へ新学習指導要領に関する情報提供 ○通知表（小学部）と指導計画（知的障がいの各教科）の様式の改善	様式改善の進捗状況による評価 A：通知表（小学部）と指導計画（知的障がいの各教科）の新様式が完成した。 B：通知表が完成し、指導計画は職員会議で協議予定。 C：通知表が完成し、指導計画は原案作成まで進んだ。 D：通知表の完成のみ。	通知表（小学部）の様式を改善した。指導計画（知的）の様式は原案を作成し、教務部内で検討中である。	C	校外研修等で得た情報を基に修正を加え、指導計画の新様式について11月中に運営委員会で提案する。より多くの意見を基に修正を加え、1月中の完成を目指す。
① 学習指導	教育研究部	○各教科・科目等での指導・支援の充実を図り、授業の工夫・改善に取り組む。	○学習指導要領の改訂に伴い、児童生徒のめざす姿や指導支援についての協議・連携の充実を図りつつあるが、部科ごとには授業改善に取り組んでいない。 ○児童生徒は、年齢も実態も幅広く、めざす姿や学びの在り方は様々であるが学習と経験を積み重ね、繋げることで学びが深まり、主体性や人との関わる力も育ってきている。昨年度までの指導方法等の工夫を引き継ぎつつ、主体的・対話的で深い学びを通して、新しい時代に必要な資質や能力を身につけた児童・生徒の育成に取り組みつつある。	○校内の研究主題の【「何ができるようになるか・何を学ぶか・どのように学ぶか」を考えた授業づくり】に沿って指導・支援を考え、計画を立て授業に取り組む教師集団。 ○主体的・対話的で深い学びを通して、新しい時代に必要となる資質・能力（3つの柱：①生きて働く知識・技能②思考力・判断力・表現力③学びに向かう力・人間性）を身につける児童・生徒。	○年間9回のグループ研究会と月1回の部科会の研究会を部科ごとの研究会として実施 ○1回の全体報告会の実施 ○年間3回の授業研究会の実施（部科ごとで1回） ○教職員の相互授業参観を通して、お互いの授業を参観し、気づきあい学びあいをすることで研究の推進、専門性の向上、授業力の更なる向上につなげる。	職員アンケートにより、研究・授業改善について成果を感じたと答えた職員の割合で評価 A：3分の2以上の職員 B：半数以上3分の2未満の職員 C：3分の1以上半数未満の職員 D：3分の1未満の職員	【中間評価に関するアンケート結果】 <u>1 研究・授業改善の成果について</u> （1）部科ごとに研究テーマを設定し、指導・支援を考え、計画を立て研究に取り組むことができたか。 A意欲的に取り組めた。 Bだいたい計画的に取り組んでいる。 A・B→78.5％ （2）担当している児童生徒の「主体的・対話的で深い学びを通して、新しい時代に必要となる資質・能力が身についてきていると思うか。」 A大変よく身についてきている。Bだいたい身についてきている。 A・B→80.9％	B	引き続き、部科ごとに研究テーマに沿って、指導・支援を考え計画を立て研究に取り組む。また、来年度からの部科ごとの研究2年目に対して準備を進める。

様式 2

導の充実及び専門性の向上		○教職員が自ら研修を企画実施することで、視覚障がい教育の専門性の向上を図る。	○昨年度の「視覚障がい教育に関する専門性の意識」のアンケートで、「概ね分かっている。」「実践がある、又は、研修等を行うことができる。」と回答した職員が54.1%だった。内訳を分析すると、1、2年目の職員の意識の向上は特に大きい。今年度も新任職員をはじめ、2年目以上の職員も、更に専門性の向上を図る研修を継続していく必要がある。	○コロナ感染症を防止するため、職員が一同に集まって密にならにように研修できる方法について検討する必要がある。	○担当する視覚障がい教育の分野についての知識が深まり、研修を行うことができる。	○コロナ感染症防止のため、延期や中止になった研修内容を資料等（動画を含める）を見て学ぶことができる。	○校内研修を年間17回、視覚障がい教育に関する内容を中心に7分野に分けて実施する。	○3年目以降の教職員は担当分野についての研修を2～3回担当する。	○研修で使用した資料等（動画も含める）は、全職員が閲覧・活用できるように、保存場所を決め全職員に知らせる。	職員アンケートにより、研修について成果を感じたと答えた職員の割合で評価 A 3分の2以上の職員 B 半数以上3分の2未満の職員 C 3分の1以上半数未満の職員 D 3分の1未満の職員	【中間評価に関するアンケート結果】 <u>2 校内研修で担当された視覚障がい教育分野について</u> （2）担当された視覚障害分野の知識が深まり、研修を行うことができたか。 A知識が大変深まり充実した研修ができた。 B今までよりは知識が深まり、研修を行うことができた。A・B→88％ <u>3 コロナ感染防止のため、延期や中止になった研修内容や他部科の授業参観を資料等（動画を含める）について</u> （3）校内研修や授業参観（動画を含める）を通して学び、授業改善に生かすことができたか。 A全部見て学べた。授業改善に生かすことができた。→2％ Bだいたい見て学べた。現在、授業改善に生かしているところである。→33％ Cあまり見ることはできなかった。今後、見て授業改善に生かそうと思っている。→59.5％	C	来年度の研修内容の充実に向けて、研修担当者での振り返りと検討を行う会を開く。	研修の資料や動画の保存場所を明確にして、全職員に伝える。特に、着任者の先生が全研修を受けられたのか確認できる資料を作成し声をかける。また、冬季休業中などを利用して受けられなかった研修の補助的なものを実施する。
	小中学部	○主体的に仕事に取り組んだり、計画的に行動しようとしたりする意欲や態度の育成を図る。	○声かけをすれば、行動できるが、受け身であることが多く、主体的であったり計画的であったりすることがあまり見られない。	○児童生徒が主体的に仕事に取り組んだり、計画的に行動しようとしたりしている。	○キャリアパスポートを活用し、本人への意識づけを図り、系統的に指導を進める。	○学習場面等を通して、適切な行動ができていれば肯定的評価を与え、自信を持たせて行動が定着するようにする。	児童生徒の行動による評価 A:児童生徒が主体的・計画的な行動ができた。 B:児童生徒が主体的・計画的な行動がだいたいできた。 C:児童生徒が主体的・計画的な行動があまりできなかった。 D:児童生徒が主体的・計画的な行動がほとんどできなかった。	主体的に活動に取り組む姿は見られるものの、計画的に行動しようとする姿は少なかった。	B	計画的に行動できるように見通しを持たせ、具体的に何をするのか助言を与えながら、活動に取り組んでいく。				
普通科	○生徒が自己理解に基づいた適切な進路選択・決定ができるよう、キャリア教育の充実を図る。	○作業学習や産業現場等における実習を通して、働く意味の理解や自己理解を進めている。3年生と1年生では状況が異なるが、まだ卒業後の過ごし方や就労についてのイ	○産業現場等における実習の経験や就労・社会参加に関する情報提供により、適切な進路選択・決定ができる。	○生徒の状況や希望に沿った実習先の選択、事前事後指導の充実を図る。	○ハローワークや就労・生活支援センター等の関係機関とも連携して、就労・社	（3者）懇談や進路希望調査の結果を受け、部科教職員で評価する。 A：生徒が自己の進路を考え、進路選択・決定をしている。 B：生徒が自己の進路を具体的に考えている。 C：生徒が自己の進路を考える意識はあるが具体的には考えていない。 D：生徒が自己の進路を考える意識が不十分である。	3年生は卒業後の就労を見越して実習先の選択を行った。1年生は経験を広げるという目的で実習先を選択した。	C	卒業生の話を聞く機会を持つことや年金の学習など卒業後の社会参加を考える学習を設定し、将来の生活に必要な情報提供を行う。					

様式 2

② キャリア教育の推進			メージを十分につかめていない生徒もいる。		会参加に関する情報提供を行う。				
				○1年間をかけてキャリアパスポートを作成し、自己理解が深まる。	○ホームルーム活動を中心として、生徒一人一人の目標修正などを支援し、個性を伸ばす指導へとつなげる。	キャリアパスポートを部科教職員で評価する。 A：キャリアパスポート作成により、十分に生徒の自己理解が深まった。 B：キャリアパスポート作成により、生徒の自己理解が深まってきている。 C：キャリアパスポート作成により、生徒の自己理解が深まる兆しがある。 D：キャリアパスポートを作成しても、生徒の自己理解が深まっていない。	それぞれの生徒が担任とともにキャリアパスポートの書式に沿って記入をしている。自分の長所や将来の夢などを確認することができた。実習日誌も生徒理解・指導につながった。	C	実習などの機会をとらえてキャリアパスポートの記入や活用を進める。キャリアパスポートがさらに有効なものとなるよう、書式や活用の仕方を見直していく。
	保理専攻科	○進路目標の具体化につながる体験活動や進路情報の提供、充実を図る。	○生徒たちは、現場実習や職場見学、進路情報などを通じて、自己の進路について考えているが、1，2年生については希望先が明確な生徒は少ない。	○1年生は様々な進路や理療師の役割を知る。 ○2年生は自己の目標が定まりつつある。 ○3年生は進路が決定している。	○2学期以降の体験学習や見学の実現と、事前事後指導、生徒同士の報告会などによる個々のキャリア教育の充実を図る。	各学年の達成目標に対しての状況を総合的に判断。 A：全員の生徒が自己の将来について述べることができる。 B：8割の生徒が自己の将来について述べることができる。 C：6割の生徒が自己の将来について述べることができる。 D：4割の生徒が自己の将来について述べることができる。 E：自己の将来について述べることができる生徒は4割未満である。	新型コロナウイルス感染症拡大予防対策のために、校外学習が出来きず、具体化には至っていない。 3年生は去年の見学をもとに進路希望先は決まっているが、今後の求人情報をもとに検討も続ける。2年生は希望候補先等への見学ができていないが、希望する条件などは定まってきている。1年生は進路希望は定まっていないが理療の役割を知ることはできている。	C	10月以降の体験学習や見学は感染対策の上、実施していく。
	支援部	○個に応じた進路情報の提供と進路実現に努める。	○生徒の居住地が全県にまたがっているため、県全域の職場開拓、求人等の情報が必要である。	○進路先や体験先の開拓及び情報提供を行うことで、進路選択の幅が広がっている。 ○キャリアパスポートを活用し、自分の夢や目標について考える。 ○産業現場等における実習や個に対応した事業所見学等、体験活動を実施する。	○就労定着支援員、ハローワーク等関係機関と連携を図る。 ○キャリアパスポートを活用し、自分の夢や目標について考える。 ○産業現場等における実習や個に対応した事業所見学等、体験活動を実施する。	児童生徒の取り組みとアンケートにより、総合的に評価 A. 生徒は得た情報を、将来の進路や実習先選びに役立てている。 B：生徒は自分の将来や進路に関する情報を得ようとしている。 C：生徒は自分の将来について、関心はあるが情報収集しようとしていない。 D：生徒は自分の将来や卒業後についてまだ関心がない。	新型コロナウイルスの影響で1学期は体験活動、事業所見学が進まなかった。9月ごろより実際に体験の機会が増えてきた。	C	引き続き就労定着支援員、ハローワーク等関係機関と連携を図り、情報提供する。 個に対応した事業所見学等、体験活動の機会を設定する。
	○一人一人の社会的・職業的自立に向け、キャリア教育を推進する。	○キャリア教育に関する自己の課題について、児童生徒の意識に差がある。	○児童・生徒がキャリア教育に関する自己の課題がわかり、解決に向けて取り組んでいる。	○生活年齢、発達年齢にあった言葉で各自の目標を掲示し、意識できるようにする。	児童生徒の取り組みとアンケートにより、総合的に評価 A：自分の課題を意識し、自ら解決に向けて取り組んでいる。 B：自分の課題解決に向け、すすんで取組もうとする姿が見られる C：自分の課題解決に向けてアドバイスを受けて取り組んでいる。 D：自分の課題解決に向けて取組もうとする姿がみられない。	生活年齢、発達段階で取り組みや意識に差はあるものの、課題解決に向けて取り組んでいる。	C	目標を確認できるよう教室に掲示したり、生徒が目標について意識できるよう担任に声かけを行う。	

様式 2

	寮務部	○卒業後を見据え、自立した生活を送るよう に主体性を育む。	○保護者、保証人、鳥取 盲学校各部科・鳥取聾学 校との連携が十分ではな い。連携を強め、一貫し た取り組みを行い卒業後 の自立生活に向けて、舎 生の主体性を育成するこ とが課題である。	○実態把握を職員 全体で共有し、舎生 の主体的な行動を引 き出すような教育活 動が展開されてい る。	○個別の教育支援計画をも とに、舎生一人一人の障 がい特性を理解し、社会自立 へ向けての指導支援を行 う。 ○舎生に寄り添い、観察 し、保護者保証人、部科と の連携を密にすることで、 情報を共有し、舎生の主体 性を育むための生活指導・ 支援について、職員全体で 創意工夫し、共有、実践す る。	保護者・保証人、学部と連携し、個々の課題を共有・実践す ることで、舎生の主体的に行動する姿が（に） A：定着している。 B：つながっている。 C：つながりつつある。 D：共有・実践することが不十分で、舎生の主体的に行動す る姿を引き出せていない。 E：共有・実践することができず、舎生の主体的に行動する 姿につながっていない。	保護者、保証人や学 校担任と積極的に情報 共有することに努め、 一貫した取り組みにつ ながっている。（舎生 により若干の差はある が） 舎生一人一人の目標 （将来像）や課題を意 識し、支援目標をベー スに見通しを持ちやす くしたり、役割を任せ たりし、舎生自身が考 え主体的に行動できる ように取り組んでい る。	C	今後も保護者、保証 人、学校担任、関係機 関等との情報共有を密 に連携を取り、舎生一 人一人の主体性を育成 できる環境設定や声掛 けなどを継続し、自信 が持てるような経験を 積み重ねる。
③ 仲間と協力する児童生徒の育成	小中学部	○相手の気持ちを考え た言動ができるように する。	○身近な人には自分の思 いや自分がしたい行動を 伝えることができつつあ るが、知らない人だっ たり、予期せぬ場面だっ たりすると自分の思いが伝 えられなかったり、不適 切な言動になったりする ことがある。	○集団場面でも、相 手の気持ちを考えた 適切な言動ができ る。	○児童生徒会活動等集団生 活の場で異年齢の仲間と交 流する機会を持ち、自分の 考えが言えるようにする。 ○合同学活や合同遊びを設 定し、仲間のことを考えた 活動内容を発案・運営する ようにする。	児童生徒の言動による評価 A：相手の気持ちを考えた言動がほぼできた。 B：相手の気持ちを考えた言動がだいたいできた。 C：相手の気持ちを考えた言動があまりできなかった。 D：相手の気持ちを考えた言動がほとんどできなかった。	合同学活等集団活動 では、周りを意識した 言動ができつつある が、普段個人で学習す ることが多いため、相 手の気持ちを押し量る ことが難しい。	B	居住地校交流や学校 行事等を通して、集団 の中で相手の気持ちを 考えた言動ができるよ う、教師が相手の気持 ちを伝えたり、見守り や励ましを行ったりす る。
	指導部	○児童生徒の自己理 解・他者への思いやり の心を育み、共同活動 の場を設ける。	○小学部1年から50歳 代の児童生徒がそれぞ れ自分と向き合い、自己理 解、自己の障がい理解を 進めている。 ○年代、障がいの状況の 大きく異なる児童生徒な ので、状況の異なる人の ことまで考えが至らず、 自分本位の考えになって しまうこともある。	○児童生徒が自分も 友だちも大切にし、 仲間と協力して活動 している。	○児童生徒会行事の担当者 話し合いで、小学部から専 攻科までの全児童生徒が活 躍でき、楽しめる内容であ るかを考える場を持つ。行 事後にも児童生徒・職員の 担当で評価を行う。	A：全ての行事の事後に話し合いが持たれ、児童生徒・職員 の話し合いで、みんなが十分に活躍でき、楽しむことができ たと評価された。 B：8割の行事の事後に話し合いが持たれ、児童生徒・職員 の話し合いでみんなが概ね活躍でき、楽しむことができた と評価された。 C：6割の行事の事後に話し合いが持たれ、児童生徒・職員 の話し合いでみんなが少しは活躍でき、楽しむことができた と評価された。 D：4割の行事の事後に話し合いが持たれ、児童生徒・職員 の話し合いでみんながあまり活躍できず、楽しむこともでき なかったと評価された。	新型コロナウイルス の影響で中止となった 行事もあり、活動場面 は少なかったが、募金 活動や文化祭準備で児 童生徒会の話し合いが 持たれ、児童生徒がそ れぞれ役割を持ち活躍 する場面が設定され た。	A	行事後のアンケート などを活用しながら、 事後の話し合いをさら に充実させていく。
	支援部	○乳幼児支援、弱視 児童生徒支援を推 進する。	○様々な見え方、学習状 況に対応した総合的な支 援が求められている。 ○東中西の特別支援教育 連絡会でLD等相談員等 と定期的に情報交換を 行っている。 ○就学先決定に向けての 教育相談のニーズが高 まっている。	○関係機関と連携 し、校内の人材等を 活用しながら、見え にくさのある乳幼児 や児童生徒、その保 護者や関係者等の多 様なニーズに応じて 支援を推進してい る。	○ニーズに応じ、電話、訪 問、来校等により、相談者 と多く接点を持つようにす る。 ○校内で教育相談の事例検 討を行い、見えにくさへの よりよい対応・支援方法を 模索する。 ○LD等相談員等と連携 し、見えにくさ等の困難さ を抱える児童生徒への支援 をすすめる。	教育相談等の状況を見て総合的に評価 A：関係機関と連携しながら、校内の人材等を活用し、ニー ズに応じた支援を推進している。 B：校内の人材等を活用し、ニーズに応じた支援を推進して いる。 C：ニーズに応じた支援を推進している。 D：支援を推進している。 E：支援が推進できていない。	新型コロナウイルス で保育所訪問支援がで きないこともあった が、電話相談で対応し た。そのほかは教育相 談の依頼に応じ、地域 の感染拡大状況、お互 いの健康状態等考慮し ながら進めることがで きた。 就学先決定に向けて は地域の学校、弱視特	B	相談に応じ、より適 切な情報提供、支援へ のアドバイスができる よう校内の協力を得な がら対応を進める。 ・就学先決定後等に必 要な支援の引き継ぎが できるよう支援会議等 に参加する。

様式 2

④ センター的機能の充実					○市町の就学担当者と連携し、相談・学校見学等交えながら、就学支援をすすめる。		別支援学級、盲学校とそれぞれの学校説明や体験に同行したり、支援会議に参加したりし、適切な判断のための情報提供を行った。		
		○各市町村や視覚障がい関係機関との連携を推進する。	○昨年度、眼科医会によるスマートサイトが立ち上がり、眼科医等との連携がさらに進んだ。 ○市町の就学担当等と連携し、保護者とともに、小学校見学等を実施した。		○県内市町村の乳幼児健診担当課を訪問し、見えにくさのある乳幼児の早期発見に努める。 ○依頼等のない市町等へもこちらからかかわりを持つ。		県内市町村の乳幼児担当課に、乳幼児の見えにくさに関する教育相談のチラシを送付した。 10月に中部地区視覚・聴覚教育支援センターわくわくが開設された。中部地区の各関係機関にチラシにて周知を図る。	B	西部地区特別支援教育連絡協議会で、小中学校向けに学校の特色・就学までの流れについて紹介する等機会を得て広報する。
		○視覚障がい理解を推進する。	○県内の学校や、市町村からの研修依頼を受け、依頼に合った研修内容を選び、研修等を行っている。 ○昨年度は、鳥取県ロービジョン研修会や鳥取県養護教諭の研修会でセンター的機能についての情報提供を行った。		○本校のホームページやチラシ、交差点角の掲示板の内容を精査し、最新情報に更新しながら、引き続き本校のセンター的機能の周知を図る。 ○ニーズに応じた研修会等の設定を行う。		新型コロナウイルスで研修依頼は減ったが、感染防止対策をしながら依頼の研修・学校見学等に対応した。	B	ホームページの支援部関連の部分について、最新の情報になるよう定期的に点検する。 ロービジョンセミナーで視覚障がい教育等についてディスカッションを行う。
⑤ 児童生徒の健康と安全を守る	小中学部	○望ましい生活習慣や防災意識の定着を図る。	○手洗いや身だしなみ等の衛生面に課題がある。 ○危険を予測しようとしているが、不注意なことがあり、危ない場面がある。	○望ましい生活習慣や防災意識が定着し、安心安全な学校生活が送れる。	○養護教諭と連携しながら、健康教育を計画的に指導していく。 ○ヒヤリハット報告を共有し、危険を予測したり、回避したりする行動ができるようにしていく。	児童生徒の行動による評価 A：望ましい生活習慣や防災意識が定着した。 B：望ましい生活習慣や防災意識がだいたい定着した。 C：望ましい生活習慣や防災意識があまり定着しなかった。 D：望ましい生活習慣や防災意識がほとんど定着しなかった。	身だしなみを整え、清潔にしておこうとする意識はあるが、もう少し定着していない。 災害時にどう行動すればよいか分からないことがある。	B	生活習慣に関する学習を定期的を実施する。ヒヤリハット報告を共有し、危険を予測回避できるよう、災害時の行動を想起させる学習を行う。
	教務部	○個人に関する情報の管理方法を改善する。	○教務部が管理する個別ファイル内の個人情報や各種指導記録に、他資料との内容の重なりや、活用頻度の減少が見られる。	○個別ファイルの内容・様式・保存方法を改善する。	○個別ファイルの活用に関するアンケート結果を分析する。 ○各分掌と連携して、内容の整理と様式の改善をする。 ○より活用しやすい資料の保存方法や保存期間の検討を行う。	改善の進捗状況による評価 A：個別ファイルの内容・様式・保存方法の改善が完了した。 B：内容・様式・保存方法を職員会議で協議予定。 C：内容・様式・保存方法の原案作成まで進んだ。 D：アンケート結果の分析のみ。	アンケート結果と改善の方向性をまとめ、各分掌に協力依頼を行った。各分掌の改善案をまとめ、原案を作成して教務部内で検討中である。	C	個別ファイルの改善について11月中に運営委員会で提案する。より多くの意見を基に修正を加え、1月中の完成を目指す。
		○感染症予防の対策がとられ、児童生徒が安心安全に学校生活を送ることができる。	○新型コロナウイルス感染症の流行により、学校生活の様々な場面を感染症予防の視点から見直したり、個々の予防行動の実践が必要となっている。	○児童生徒が感染症予防に関し、安心感をもって学校生活を送っている。	○感染症予防の視点からの学校生活環境を見直す。 ○児童生徒への保健教育の充実を図る。	アンケートで評価 A：学校生活環境の見直しと、児童生徒の感染症に対する一般的な予防行動が十分できている。 B：学校生活環境の見直しと、児童生徒の感染症に対する一般的な予防行動が概ねできている。 C：学校生活環境の見直しと、児童生徒の感染症に対する一般的な予防行動があまりできていない。 D：学校生活環境の見直しと、児童生徒の感染症に対する一	生徒が予防行動として自分で設定した目標に対する自己評価では、A：7人、B：3人という回答だった。	B	毎日の健康観察で振り返りをしていることもあり、目標を達成することを通して感染症予防の意識が継続していると考えられる。一度目標を見直して、後

様式 2

	指導部		○小学部 1 年から 5 0 歳代の児童生徒がおり、それぞれ年齢や基礎疾患、体力の状況等に応じてさまざまな健康課題がある。			一般的な予防行動がほとんどできていない。			期にも新たな気持ちで取組が続けられるようにする。
		○個々の健康課題解決に向けて取組を行い、健康的な生活を送るために支援する。		○実践をとおり、健康課題の解決に近づいている。	○学部や教科等と連携して、個別のプログラムを組み年間を通して実践していく。	目標に対する達成度で評価 A：児童生徒の目標は 1 0 0 % 達成できた。 B：児童生徒の目標は 8 0 % 達成できた。 C：児童生徒の目標は 6 0 % 達成できた。 D：児童生徒の目標は 4 0 % 以下の達成だった。	生徒の自己評価では、1 0 0 % 達成という回答もあれば、4 0 % 以下という回答もあり、バラツキが大きかった。	C	学級掲示を作成して、目標を意識できるようにする。月 1 回程度、指導部や担任から声かけを行い、状況を確認するとともに継続を促す。
⑥ 環境整備を通じた業務の改善	総務部	○共有フォルダの見直しを行う。	○担当者が、行事等計画立案の際、過去の同じ行事計画データを部科分掌フォルダ内に保存したままにするため、共有フォルダ内に同じフォルダが複数できている。 ○各自の判断でフォルダ内にデータの保存をしているため、参考データを探す際に時間がかかる。	○共有フォルダ内は、保存のルールに則ったデータ管理ができています。 ○業務に必要なデータを短時間で探し出すことができる。	○共有フォルダ内のデータ保存のルールの見直しをおこなう。 ○重複保存されているデータの整理を行う。 ○必要以上に残している個人の写真動画データについても保存の見直しを行い、個人情報流出等につながらないようにする。	A：各部科・分掌のフォルダ内の整理が過去 3 年分終了した。 B：各部科・分掌のフォルダ内の整理が過去 1 年分終了した。 C：各部科・分掌のフォルダ内の整理が今年度分終了した。 D：各部科・分掌のフォルダ内の整理に取り掛かされていない。	分掌業務の中で実際に具体的に取り掛かれていなかった。	D	具体的なルールを総務部より提案し、早急に周知を行う。 重複しているフォルダの削除から始める。 期間を決めて、写真動画等も削除を行う。
	総務部	○校内外の掲示物の整備をおこなう。	○校内廊下掲示の分担があやふやで同じものが長期間掲示されている。 ○以前より校舎近くの交差点に掲示板が設置されているが、盲学校の活動や視覚障がいについて、地域のかたにお知らせするツールとして十分な活用に至っていない。	○掲示物等を含めた学習を計画し、掲示板を活用することで、時間を有効に使い業務改善につながっている。	○校内の掲示板の分担を決める。 ○期日が過ぎたポスターなどは撤去し、環境整備に努める。 ○毎月の分掌会の中で、交差点掲示板に貼るものについて決定する。 ○校内の掲示板に同じものを貼り、校内での周知を図る。	校外掲示板：掲示物張替えの頻度で評価 A：6 月以降毎月張り替えた。 B：6 月以降 2 か月に 1 回張り替えた。 C：6 月以降 3 か月に 1 回張り替えた D：6 月以降 4 か月に 1 回になってしまった。	掲示物の整備を通して、環境整備に取り組もうとしているが全体への呼びかけがほとんどできていない。	D	期日のすぎた広告等は撤去を呼び掛ける。 参考例として、掲示板をうまく利用している部科等を紹介するなどの具体的な取組を展開する。

評価基準 A：十分達成 B：概ね達成 C：変化の兆し D：まだ不十分 E：目標・方策の見直し

【100%】

【80%程度】

【60%程度】

【40%程度】

【30%以下】